### 九州大学学術情報リポジトリ Kyushu University Institutional Repository

### 中国における溝口雄三の中国近代像の受容

王, 晶 九州大学大学院比較社会文化学府

https://doi.org/10.15017/24643

出版情報: Comparatio. 15, pp.101-110, 2011-12-28. Society of Comparative Cultural Studies, Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University バージョン: 権利関係:

# 中国における溝口雄三の中国近代像の受容

王晶

はじめに

う問 戦と反駁となる。そして中国の内発的な近代を主張することを通 と多元的近代という世界像である。中国歴史の内部から発した うした問題を考慮しながら、本論の内容を展開していきたい。 な意義を持ち、 対化したのである。グローバリゼーションが急激に進む今日にお が近代を歩み始めたという従来の外発的な見方に対する大きな挑 きく異なる彼自身の独特な見方を提示している。それはヨーロッ 、中心主義を放棄した「異」ヨーロッパ的近代という中国近代像 | 異」ヨーロッパ的近代という主張は、西洋の衝撃によって中国 中国思想史研究者である溝口雄三は中国における「近代」とい 題に長い歳月を費やし、中国の近代について従来の視点と大 溝口雄三の近代中国像とそれに関連する世界像はどのよう ヨーロッパ的な近代の絶対的な地位を揺るがし、それを相 われわれはそれをどのように発展させるのか、 そ

### 溝口中国学に対する評価

れている。例えば、日本側で並木頼寿は「日本における中国近代中日両国の研究者、特に中国の歴史哲学者たちから盛んに議論さ溝口雄三の描いた中国近代像は、日本における中国研究として、

史研究の動向」の中で次のように述べている。

本野英一「一八六〇年代上海に於ける買弁登録制度の挫折本野英一「一八六〇年代上海に於ける買弁登録制度の挫折本野英一「一八六〇年代上海に於ける買弁登録制度の挫折本野英一「一八六〇年代上海に於ける買弁登録制度の挫折本野英一「一八六〇年代上海に於ける買弁登録制度の挫折本野英一「一八六〇年代上海に於ける買弁登録制度の挫折

並木頼寿の評価である。 たとする従来の通説に挑戦して転換をした人物であるというのが、たとする従来の通説に挑戦して転換をした人物であるというのが、

ンタリズムとの関係性から見て次のように述べる。リズムの視座―』と題する著書の中で、溝口雄三の主張をオリエ加々美光行は、『鏡の中の日本と中国―中国学とコ・ビヘイビオ

いう点にある。つまり、溝口風にいえば、縦糸が横糸を凌駕いで、「東方アジア」の「内発的近代化」に成功しうるのかとに思われる。(中略)問題は、そうした縦軸の「内発的近代化」で、「すにその内容が「欧米」モデルに近い方向を辿ったにせよ、「オにその内容が「欧米」モデルに近い方向を辿ったにせよ、「オにおわれる。(中略)問題は、そうした縦軸の「内発的近代化」が、低溝口はこの点に関しては、縦糸の内発性が強く現れれば、仮溝口はこがに大手である。つまり、溝口風にいえば、縦糸が横糸を凌駕いで、「東方アジア」の「内発的なものを進せな然あるからだ。「近代化」がいかに内発的なものであっても、その内容が「近代化」がいかに内発的なものであっても、その内容が「近代化」がいかに内発的なものであっても、その内容が

ということである。(注2) し、「オリエンタリズム」の圧力に勝利することができるのか、

きるのか」という指摘をみれば、 うに思われる」、「「オリエンタリズム」の圧力に勝利することがで 対する加々美光行の批判と懐疑は明らかである 「「オリエンタリズム」の受動性は克服されると楽観しているよ 溝口雄三が描いた中国近代像に

視して通ることのできぬ業績となっていることは確かである」と ではないけれども、著者の方法論とも言うべき付論は、歴史学を 究を担う者にとって必読の書といえよう」、「全面的に同意するの 方に限界があると指摘したのである (注3)。そのほか、溝口雄三 評価してから溝口雄三の主張に対する疑問を述べ、溝口雄三の見 奥崎祐司は「書評溝口雄三『中国前近代思想の屈折と展開』」の中 ろもある。 文である」と評価した内容である。 成果を挙げている。今後、この時期を研究するものがけっして無 (注4)もある。それぞれ挙げてみれば、「本書はこれから中国研 て言及した文章は管見した限りそれほど多くはない。 そのほか溝口雄三の著書に対する書評はいくつかある。例えば 「本書は、この時期の中国思想史研究において、見事な一つの の著書『方法としての中国』と『中国の衝撃』に対する書評 日本側において、書評を除いて溝口雄三の中国学に関 関心のある向きには、 目を通しておいてもらいたい一 そのほか、異議を唱えるとこ

次に溝口雄三に対する中国側の評価を見てみる。 武漢大学の中国哲学研究者の蔡慶は の中で次のように述べている。 「溝口雄三的中国学方法研

> 体性という問題を提出して、中日学界で広く注目された。溝 をもって東方思想文化を計る従来のやり方に対して、文化の 彼は思想史、哲学史、 ている。(注5) 口雄三の中国学研究方法は時代的意義も学術的意義もそなえ 価値の多元性という観点を主張し、「アジア近代」における主 方法において、溝口雄三は西洋的範疇、 って中国研究を行い、相当な成果をあげた。特に中国学研究 溝口雄三は当代日本中国研究における有名な学者である。 社会史、経済史などの広い分野にわた 論理、 価値判断基準

蔡慶は溝口雄三を高く評価している。 来のやり方に対して、アジア近代と多元的観点を主張した点で、 西洋的範疇、論理、 価値判断基準をもって東方アジアを計る従

ように評価している。 このような主張は観念的に、 理性的に「ヨーロッパ中心論」

中国社会科学院の葉坦は「日本中国学家溝口雄三」の中で次の

価することだけにとどまらず、それを超えて、もっと広い「グ 果で中国学研究に貴重な理論方法と判断基準を提供した点で ローバルな視野」を見いだそうとした。(注6) すると同時に、各国と各民族独自の価値と歴史プロセスを評 さらに重要である。溝口教授は「ヨーロッパ中心論」を否定 限界を解明しただけでなく、具体的、客観的研究方法と成

雄三的中国学研究―」という論文の中で、多元化、内発的な近代、 ーロッパ価値体系の相対化という三つの点から溝口雄三の新た 史艷玲、 張如意は「日本中国学研究的新視角―当代漢学家溝

 $\Xi$ 

な研究視角を解釈している。(注7)

中国社会科学院近代史所の李長莉は「掲示多元世界中的中国原 中国思想の内在的流れを把握し、中国自身の価値観念の中か 大とする見かたが、アジア国家の歴史の本来の姿を歪曲した 武とする見かたが、アジア国家の歴史の本来の姿を歪曲した と指摘して、従来の認識方式を徹底的に批判した。彼は世界 と指摘して、従来の認識方式を徹底的に批判した。彼は世界 と指摘して、従来の認識方式を徹底的に批判した。彼は世界 と指摘して、従来の認識方式を徹底的に批判した。彼は世界 とが、アジア国家の歴史の本来の姿を歪曲した とが、アジア国家の歴史の本来の姿を歪曲した とが、アジア国家の歴史の本来の姿を歪曲した の多元性と平等性の立場に立って、中国の歴史自身の中から の多元性と平等性の立場に立って、中国の歴史自身の中から のをでといる。

でもある。(注9) 本的な見直しであり、また「近代的」価値への本質的な懐疑偏見であると認識した。この結論は、従来の近代認識への根の見かたは、西洋中心主義と西洋優越意識によって生まれた的であり、西洋原理を普遍的、唯一の近代的規則とした従来的である。(注9)

ンCハら。 界の多元化への要求」という点から、溝口雄三の主張を高く評価界の多元化への要求」という点から、溝口雄三の主張を高く評価本長莉は主に「ヨーロッパ中心論に対する徹底的な批判」と「世

で省格する。 釈し、分析した論文は他にもある(注10)。ここでは紙面の関係釈し、分析した論文は他にもある(注10)。ここでは紙面の関係中国学術界の中国思想と哲学分野において溝口雄三の見方を解

のことから分かる。そして日本で書かれた論文と評論とは相違点一年、一九九二年から最近まで盛んに書かれていることは、以上中国側で溝口雄三の中国学を対象とした論文と評論が、一九九

までいい。 は、 に対して中国側には批判意識が欠如していると言えるのではないのである。 これは中国近代を研究の主題とする溝口雄三 があることに注目する。日本の中国研究者は溝口雄三の主張が新 があることに注目する。日本の中国研究者は溝口雄三 があることに注目する。日本の中国研究者は溝口雄三の主張が新 があることに注目する。日本の中国研究者は溝口雄三の主張が新 があることに注目する。日本の中国研究者は溝口雄三の主張が新 があることに注目する。日本の中国研究者は溝口雄三の主張が新 があることに注目する。日本の中国研究者は溝口雄三の主張が新 があることに注目する。日本の中国研究者は溝口雄三の主張が新

### 内発的な「異」ヨーロッパ的近代

うに言う。となったことに対して、溝口雄三は批判的である。そして次のよ観が絶対的な価値判断の基準となって、中国の優劣を決める道具ロッパ的な近代と異なるという意味である。ヨーロッパ的な近代は、文字通りヨー溝口雄三の言う「異」ヨーロッパ的な近代とは、文字通りヨー

ことになろう。(注11) 「異」ヨーロッパ的独自性に即して考える必要があるというよ中国にせよ、それ自体の前近代にもとづいたそれぞれのよ後わたくしたちがアジアの近代を考えるには、日本にせ

胎としており、したがってそれは中国の前近代の歴史的独自中国の近代はほかならぬそれ自身の前近代をあらかじめ母

性をみずからの内に継承するものである。(注12)

に当然、立脚させられることになる。(注13)世界史的な普遍もまた、この「異」すなわち個別的独自性

前近代の歴史との連続性、そして中国固有の独自性という二点前近代の歴史との連続性、そして中国固有の独自性という二点が「異」ヨーロッパの持つ特徴であるということは、まず右の内が「異」ヨーロッパの持つ特徴であるということは、まず右の内が「異」ヨーロッパの持つ特徴であるということは、まず右の内が「異」ヨーロッパの持つ特徴であるということは、まず右の内が「異」ヨーロッパの持つ特徴であるということは、まず右の内が「異」ヨーロッパの持つ特徴であるということは、まず右の内が「異」ヨーロッパの持つ特徴であるということは、まず右の内が「異」ヨーロッパの持つ特徴であるというには、容易なことではない。これは、大同思想である。

継承されつづけた。(注14)埋念として、構造式を変えながらも、基本的には依然として理念として、構造式を変えながらも、基本的には依然として孫文の民主主義(四億人の豊衣豊食)、またその後の社会主義食為天、均貧富、万物得其所)は、例えば清末の大同思想、歴代王朝によって継承されてきた「天」の統治理念(民以歴代王朝によって継承されてきた「天」の統治理念(民以

接結びつけることができる。(注15)さらにさかのぼって十六、十七世紀の――中国前近代思想に直たというのではない。(中略)近代的大同思想は戴震ら――いやこの大同的な近代は、十九、二十世紀に突如として起こっ

らあった「天」の理念は、十六、十七世紀になってから中国の全ここで思想レベルの「大同」が取り上げられている。かつてか

民民主主義的な革命へと一貫して発展していくと溝口雄三は述べ同思想から孫文の大同共和的な社会革命へ、さらには毛沢東の人体的生存をめざす大同的調和を基調としたものとなり、清末の大

る。

えよう。それについて、溝口雄三は以下のように述べている。をれは、溝口雄三にとっての近代の概念が問うものでもあると言想から大同的な近代に至る道は、どのように位置づけられるのか。耳具」ヨーロッパ的な特徴を 男ーロッパ的な特徴である。しかし「異」ヨーロッパ的な特徴をヨーロッパ的な特徴を 関連付けられるので、それは当然「異」ッパにはないという独自性をも持っているので、それは当然「異」 ここで「大同」は、前の歴史との連続性を見せながら、ヨーロ ここで「大同」は、前の歴史との連続性を見せながら、ヨーロ

ではないかと提言した。(注16) ではないかと提言した。(注16) かたくしは最近ある国際シンポジウムで、アジアにおいてわたくしは最近ある国際シンポジウムで、アジアにおいておたくしは最近ある国際シンポジウムで、アジアにおいておたくしは最近ある国際シンポジウムで、アジアにおいてではないかと提言した。(注16)

イプのある歴史変化の文脈を挙げたい。其の文脈をどう呼称私は十六、十七世紀以降に変化の初発が認められる中国タ

脈を見通す視座をここでは内発変動型と呼んでおこう。(注するか、いろいろと異論が予測されるので難しいが、この文

で表せば、次のようである。
で表せば、次のようである。
で表せば、次のようである。
で表せば、次のようである。
に表していかならである。
というである。
というで「異」ヨーロッパ的な特徴としての大同思想は、中生的な近代の一つの現われであるというのが、溝口雄三の主張で生的な近代の一つの現われであるというのが、溝口雄三の主張である。
とこで「異」ヨーロッパ的な特徴としての大同思想は、中ある。
ここで「異」ヨーロッパ的な特徴としての大同思想は、中ある。
とこで「異」ヨーロッパ的な特徴としての大同思想は、中本ののの再定義を試み、その拠点を中国においた。「大同」は中国のものの再定義を試み、それをさらにアジアにおける自生的な近代と外来で表せば、次のようである。

大同思想— 大同的近代— 変動を経て 歴史内部の 異 異  $\Xi$ 1 Ξ 1 ロッパ的特徴 口 ツ パ 的 近代

ジアあるいは中国において、「異」とは自生の意であり、中国歴史ヨーロッパ的な近代のことであるということが分かる。つまりアこの図式からわれわれは、中国独自の「大同的近代」とは「異」

固有のものを指す。

味すべきではないかと思われる。 味すべきではないかと思われる。 に、外来的な面を軽視していることは明らかである。その点こそらいに、外来的な面を軽視していることは明らかである。それはないに、外来的な面を軽視していることは明らかである。それはないのに、外来的な面を軽視していると溝口雄三は述べているが、結果のに、外来的という側面を特に重視して見ている。アジ国史内部から言うと溝口雄三の「異」ヨーロッパ的な近代観は、中には、から言うと溝口雄三の「異」ヨーロッパ的な近代観は、中には、

が、それについて溝口は少し言及している。 溝口雄三の研究において、外来的近代は重要視されてはいない

ついて言う。西洋の衝撃はただ促成作用であり、核心となるのはたらした程度のものである」と溝口雄三は、外来的近代の働きにやや変形をもたらした、という程度のものであった。(注19)がからの刺激」、「前近代の脱皮を促成した」、「やや変形をもたらした、という程度のものであった。(注19)がからの対象に、日本と中国について言うかぎり、前近代以来 ″衝撃 "は、日本と中国について言うかぎり、前近代以来

れる。加々美光行はさらに述べる。
れる。加々美光行はさらに述べる。
れる。加々美光行はさらに述べる。
れる。加々美光行はさらに述べる。
れる。加々美光行はさらに述べる。
れる。加々美光行はさらに述べる。
れる。加々美光行はさらに述べる。
れる。加々美光行はさらに述べる。

的な作用のもとで、中国の歴史はどのように動いたのか、そうしいな作用のもとで、中国の歴史はどのように動いたのか、そうして、加々美光行が懐疑的であることは明瞭である。「本社という前提で成立していると考えざるを得ない。「本」は一次の人の一位によって、われわれに従来と異なる東西の力関係を提示したのである。しかし、内から発する力を重要視するのは、外から寄せてくる力を意識せずに済むということではないである。「年者としてによって、われわれに従来と異なる東西の力関係を提示したの常になって、われわれに従来と異なる東西の力関係を提示したのである。しかし、内から発する力を重要視する海口は、外から寄せてくる力を意識せずに済むということは明瞭である。筆者としてして、加々美光行が懐疑的であることは明瞭である。筆者としてして、加々美光行が懐疑的であることは明瞭である。筆者としている方を満しないのから、中国の歴史はどのように動いたのか、そうしりな作用のもとで、中国の歴史はどのように動いたのか、そうしりな作用のもとで、中国の歴史はどのよりに対しない。

する必要があるのではないかと思われる。とも放棄して、より総合的に東西の力関係を分析する視点を創出とも放棄して、より総合的に東西の力関係を分析する視点を創出たるのではないのかと考えられる。つまり、アジアの自生的な近た多方向性の考察こそ、より明晰に中国の近代化の過程を分析で

ヨーロッパ的近代を描き出す。 が、しかしその新たな観点を批判的に受け入れることが、中国の 国観は、 がると、それは逆の行き過ぎになってしまう。溝口雄三の近代中 こには大きな危険性が潜んでいるように思われる。 三の観点が盛んに中国に受け入れられている状況を考えると、 もたらす内部からの原動力を、 われわれが非常に慎重に対処すべきところであると思われる。 研究者にとって最も重要なことではないのか。そうした点こそ、 「異」ヨ 「異」ヨーロッパ的特徴を手がかりに、 確かにわれわれに近代中国を見る新たな視座を提供した ーロッパ的近代という主張が、中国史の過大評価につな 特に重要視する。こうした溝口雄 そして「異」ヨーロッパ的近代を 中国史における「異」 溝口雄三の

### 中国近代の再発見と多元的世界

壊して、多元的世界秩序を主張するといった意味合いを含んだもを含め、もともとヨーロッパ的近代だけの一元的世界の秩序を破を含め、もともとヨーロッパ的近代だけの一元的世界の秩序を破しないであろう。ところが日本の中国研究分野で溝口雄三は、ヨしかし近代の修飾語としての「多元」は、それほど広く使われてしかし近代の修飾語としての「多元」は、それほど広く使われてしたいう言葉は現代人にとって馴染みのある言葉である。

国という要素とは離されないものである。 を創出したのである。ただ、溝口雄三が主張する多元的近代は

素の一つとした多元的な世界である。(注21) 要素の一つとする、いいかえればヨーロッパをもその構成要 ことである。(中略)中国を方法とする世界とは、中国を構成 中国を方法とするということは、世界を目的とするという

置かれた対等の概念となっている。その結合の結果、多元的な世 慮することは、既に欠くことのできないものとなっている。言い 界観が出現する点は興味深い。この多元化世界の中で、 における「異」ヨーロッパ近代とヨーロッパ近代は、同じ次元に の構成要素の一つとした多元的な世界である」に注目する。中国 かえればヨーロッパ中心の世界史はもはや無効であり、 の地域を含めた世界史を構想しなければならない。 さらに溝口雄三は次のように述べる。 ここで「中国をその構成要素の一つとする、ヨーロッパをもそ 中国を考 中国やほ

る。

うに日本をも相対化する眼によって中国を相対化し、その中 である。 国によって他の世界への多元的認識を充実させるということ 出しようということである。 元的な原理の上にもう一層、 れわれの中国学が中国を方法とするというのは、このよ また世界を目的とするというのは、相対化された多 (注 22 高次の世界像といったものを創

を語る作法と「近代」―竹内好における抵抗としての中国―」と 出する」という一文は意味深い。その点について穐山新は 相対化された多元的な原理の上にもう一層、 高次の世界像を創 「中国

題する論文の中で次のように述べている。

することは、普遍史的な意義をもった「近代」の価値を追及 することと同じなのである。 溝口にとって、中国における「近代」 (注 23 の独自性を明らか

もった「近代」を模索する道あるいは方法となることは明瞭であ 提示しなったが、中国における独自の近代とは、普遍的な意義を というのはどういうことなのか、溝口雄三はわれわれにはっきり ものを指す。さらにその上にもう一層の高次の世界像を創出する 展プロセス)、ヨーロッパ原理といった多元化世界の構成要素たる 相 |対化された多元的な原理というのは、中国原理(中国独自の発

うことではなく、先後のタテの原理を並列のヨコの原理に転 いうことなのである。(注24) 世界の創造それ自体でもあるところの原理の創造に向かうと ものでなくてはならない。中国を方法とするということは、 討や見直しは、新しい原理の模索と創造にそのままつながる 換するものでなくてはならない。 タートする世紀と予測されるが、その並進は先進に並ぶとい 紀であった。二十一世紀はアジアがヨーロッパと並進してス この二十世紀は、 ヨーロッパを先進としてスタートした世 つまり従来の諸原理の再検

しい原理は、 なくてはならない」と溝口雄三は指摘しているが、創造された新 はならない、新しい原理の模索と創造にそのままつながるもので 先後のタテの原理を並列のヨコの原理に転換するものでなくて 中国原理もしくはヨーロッパ原理と転換できるもの

唆したのである。 であり、言い換えれば、新しく創造された原理は中国でもヨーロであり、言い換えれば、新しく創造された原理は中国でもヨーロであり、言い換えれば、新しく創造された原理は中国でもヨーロであり、言い換えれば、新しく創造された原理は中国でもヨーロ

ではないのかと思われる。

### おわりに

ますます重要になってくるであろう。 増えていく今日においては、溝口雄三の中国近代像の受容問題はって、溝口雄三の著書が多く訳され(注25)、それに対する評論もあるいはこれからも直面する大きな問題であろう。特に中国にと鉱脈である。しかしその資源をいかに利用するのか、それは今日鉱脂口雄三の近代中国像は中国研究の分野において非常に豊かな溝口雄三の近代中国像は中国研究の分野において非常に豊かな

「異」ヨーロッパ的近代は、溝口雄三の近代中国観を導き出す

有意義な継承となると思われる。
てより高次の世界を創出するように努めることこそ溝口中国観の一員となる中国は、ヨーロッパ的近代と共存する世界の一員とし一種の近代超克論としてとらえられてはならない。多元的近代の おるいはヨーロッパ的近代を乗り越えたキーワードとして理解されるが、中国の近代史だけを肥大化させ

### [付記]

一中国語引用文の訳は筆者による拙訳である。

(注2)加々美光行『鏡の中の日本と中国――中国学とコ・ビヘイビー九九三年六月)二二頁。 治、並木頼寿編『近代中国研究案内』第一部 岩波書店、(注1)並木頼寿「日本における中国近代史研究の動向」(小島晋

〔。 オリズムの視座―』日本評論社、二〇〇七年八月、一七八(注2)加々美光行『鏡の中の日本と中国―中国学とコ・ビヘイビ

二年十月)をも参考した。代思想の屈折と展開』」(『集刊東洋學』四八号、一九八代思想の屈折と展開』)(『集刊東洋學』四八号、一九八二頁。その他、三浦秀一「〈書評〉溝口雄三著『中国前近『歴史学研究』五〇四号、青木書店、一九八二年五月、二3) 奥崎祐司「書評溝口雄三『中国前近代思想の屈折と展開』」

注

誌』九八(九)、一九八九年九月。代田智明「溝口雄三著『中4) 臼井佐知子「溝口雄三著『方法としての中国』」『史學雑

注

国の衝撃』」『中国研究月報』五九(三)、二〇〇五年三月。 東アジア研究』八号、二〇〇五年一月。以上三つの書評を 西野可奈 「溝口雄三 『中国の衝撃』 東京大学出版会 」 『北 参考した。

- 注 15) 蔡慶「溝口雄三的中国学方法研究」『武漢大学学報 科学版)』二〇〇三年第五六卷 第二期、 一七九頁 (人文
- (注 6) 葉坦「日本中国学家溝口雄三」『国外社会科学』一九九二 年第六期、 六〇頁。
- (注7) 史艷玲、 版)』、二〇〇八年第五期。 溝口雄三的中国学研究—」『河北大学学報(哲学社会科学 張如意「日本中国学研究的新視角—当代漢学家
- (注 8) 李長莉 想研究—」『国外社会科学』一九九八年第一期、 「掲示多元世界中的中国原理--溝口雄三的中国思 五〇頁。

(注 9 )

同右、五一頁。

李甦平「構築儒学的新框架-読溝口雄三的『作為方法的 中国——』」『国外社会科学』一九九一年第七期、 的普遍性和特殊性—兼評孔漢思的『普遍理論』和溝口雄三 録---」『中国文化』、一九九五年第二期。顧乃忠「論文化 張莾「日本人認識中国文化的五個階段―溝口雄三教授訪談 三(日)教授談研究中国」『哲学動態』一九九一年第三期。 『作為方法的中国学』—」『浙江社会科学』、二〇〇二年 「溝口雄

## 『開発時代』、二〇一〇年第一一期等。

- (注 11) 溝口雄三「〈中国の近代〉をみる視点」(『方法としての中 国』所収、 東京大学出版会、一九八九年六月)三〇頁。
- 注 12 「〈中国の近代〉をみる視点」前掲、 一五頁。 (注11参照)
- (注13)「〈中国の近代〉をみる視点」 前揭、三十頁。(注11参照)
- (注 14) 溝口雄三「中国近代の源流」(『中国の衝撃』 所収、 東京
- 15 「〈中国の近代〉をみる視点」前掲、 大学出版会、二〇〇四年五月)一一三頁。 十八頁。 (注 11

注

- (注16)「中国における〈封建〉と近代」(『方法としての中国』所 収、東京大学出版会、一九八九年六月)一一七頁
- (注 17 「中国近代の源流」前掲、一〇六~一〇七頁。(注11参照)
- 注 18 「〈中国の近代〉をみる視点」前掲、 十四頁。(注11参照)
- (注 19 溝口雄三「近代中国像の再検討」(『方法としての中国』 所収、東京大学出版会、一九八九年六月)、五七~五八頁。
- 注 20 『鏡の中の日本と中国―中国学とコ・ビヘイビオリズムの 視座─』前掲書、一七九─一八○頁。(注2参照)
- (注 21 「方法としての中国」(『方法としての中国』所収、 学出版会、一九八九年六月)一三七頁。 東京大
- 注 22 同右、一三九頁
- (注 23 抗としての中国―」『社会学ジャーナル』(三二)二〇〇七 穐山新「中国を語る作法と「近代」―竹内好における抵
- 年三月、
- (注 25 (注24)「方法としての中国」 例えば『中国前近代思想の屈折と展開』は一九九七年に 前掲、 四〇頁。

学家溝口雄三—」『国外社会科学』、二〇〇四年第三期。孫

何培忠「日本中国学考察記(二)——訪著名日本中国

「在中国的的歴史脈動中求真―溝口雄三的学術世界―」

訳されたものもある)。

— 110 —